

横查情報月報



2011
5011
1 月

横浜市衛生研究所

平成 23 年 1 月号 目次

【トピックス】

横浜市内の蚊成虫生息状況調査結果（平成 22 年 6～11 月）・・・・・・・・ 1

残留農薬検査（その 3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

魚介類中の抗生物質、合成抗菌剤検査結果（その 3）・・・・・・・・ 9

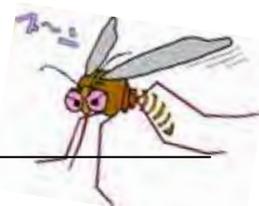
【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成 22 年 12 月 ・・・・・・・・ 10

【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報（平成 22 年 12 月分）・・・・・・・・ 14

横浜市内の蚊成虫生息状況調査結果 平成22年6～11月



医動物担当では、市内公園および港湾地区を中心に蚊成虫生息状況調査を行っています。その地域特有の蚊の生息状況を把握しておくことは、ウエストナイル熱やデング熱等の蚊媒介性感染症が発生した場合に、防除対策計画を立てるうえで重要となるからです。平成22年度は、6月から11月に横浜市内8ヶ所（各10回）で、福祉保健センター生活衛生課（保土ヶ谷、瀬谷、港南、金沢、中）の協力を得て、蚊成虫捕獲調査を行いました（図1）。調査は、猪口式ライトトラップという昆虫類を捕獲する機器を用いました。蚊を誘引するためにドライアイス1kgをトラップ屋根付近に設置し、トラップを原則として一昼夜運転しました。採集された蚊は調査地点ごとに種類を同定し、雌成虫については、蚊媒介性感染症ウイルス検査に供出しました（現在検査中のため詳細は後日横浜市衛生研究所HPに掲載します）。今回は、市内における蚊成虫生息状況調査結果について報告します。

捕獲された蚊の種類と個体数

平成22年6月から11月に行った調査で捕獲された蚊の種類と個体数を表1に示しました。捕獲された蚊成虫は、5属9種2,017個体（破損が激しく同定不能な6個体を含む）でした。最も多く捕獲された種類は、ヒトスジシマカ1,508個体（74.8%）でした。次いで、アカイエカ群*が224個体（11.1%）でした。また、キンバラナガハシカが188個体（9.3%）、ヤマトヤブカが57個体（2.8%）捕獲されました。さらに、今まで当所の調査では捕獲されることがなかったミナミハマダライエカが鶴見区で1個体捕獲されました。

*: アカイエカ群には、アカイエカ、チカイエカ、ネツタイエカの3亜種が含まれます。3亜種は外部形態だけでは、実体顕微鏡下での同定が難しいため、多くの調査ではアカイエカ群として扱われています。



図1 調査地点

表1 捕獲された蚊の種類と個体数

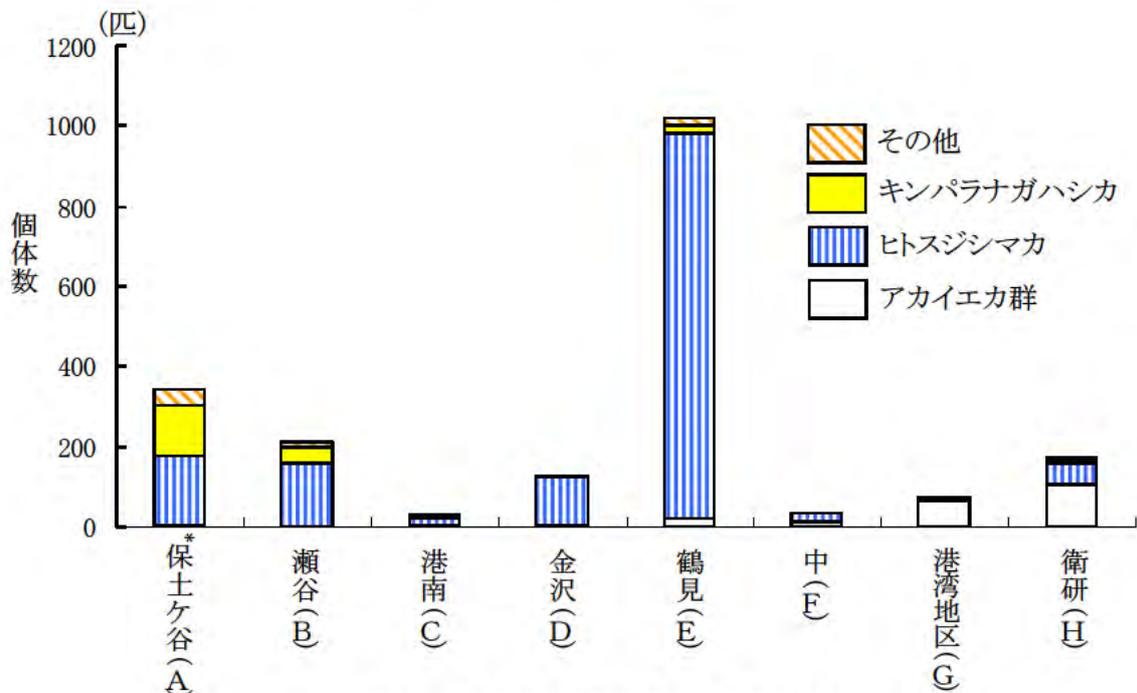
属	種	学名	個体数		
			雌	雄	合計 (%)
イエカ属	アカイエカ群	<i>Culex pipiens complex</i>	142	82	224 (11.1)
	コガタアカイエカ	<i>Culex tritaeniorhynchus</i>	8	0	8 (0.4)
	ヤマトクシヒゲカ	<i>Culex sasai</i>	9	1	10 (0.5)
	ミナミハマダライエカ	<i>Culex mimeticus</i>	1	0	1 (0.05)
ヤブカ属	ヒトスジシマカ	<i>Aedes albopictus</i>	1,269	239	1,508 (74.8)
	ヤマトヤブカ	<i>Ochlerotatus japonicus</i>	50	7	57 (2.8)
クロヤブカ属	オオクロヤブカ	<i>Armigeres subalbatus</i>	11	3	14 (0.7)
ナガハシカ属	キンバラナガハシカ	<i>Tripteroides bambusa</i>	153	35	188 (9.3)
ナガスネカ属	ハマダラナガスネカ	<i>Orthopodomyia anopheloides</i>	1	0	1 (0.05)
その他*			6	0	6 (0.3)
合計			1,650	367	2,017

*: 破損の激しいもの

〈調査地点別の蚊捕獲数〉

調査地点別の蚊捕獲数を図2に示しました。各調査地点には、1台のライトトラップを設置しましたが、保土ヶ谷区のA公園については、6台のトラップを設置したため、その合計値を図に示しました。

調査期間中最も多く捕獲されたのは、鶴見区E公園で1,020個体、ヒトスジシマカ優占でした。一方、最も少なかったのは、港南区C公園で32個体でした。また、公園はヒトスジシマカが優占でしたが、港湾地区(G)や衛生研究所構内(H)はアカイエカ群優占でした。



*保土ヶ谷のみトラップ6台分の合計捕獲数

図2 調査地点別の蚊捕獲数

アカイエカ群とヒトスジシマカってどんな蚊なの？

過去に行った横浜市内の蚊生息状況調査では、アカイエカ群とヒトスジシマカが優占であることがわかっています。今回の調査でもヒトスジシマカとアカイエカ群で全体の85.9%を占め、その傾向は変わりませんでしたが、蚊の捕獲数や種類相は、調査時の気象条件、捕獲場所の環境変化(発生源、植生、風の影響など)が複合的に関係しているため、継続的な調査が必要となります。

ここでは、横浜市内に多いアカイエカ群とヒトスジシマカについて少し解説します。

アカイエカ群の体色は茶褐色、夜寝ている時に吸血にくる種類で(夜間吸血性)、汚水枡、下水溝、雨水枡等から発生し、日本ではウエストナイル熱の主要媒介種になるであろうといわれています。また、ヒトスジシマカは、黒色の背中に白いスジがある蚊です。昼間屋外などで吸血にくる種類で(昼間吸血性)、ウエストナイル熱だけでなく、デング熱やチクングニヤ熱を媒介すると考えられています。



アカイエカ群



ヒトスジシマカ

横浜市内で多いヒトスジシマカさらに詳しくお勉強しましょう！



昨夏、ヒトスジシマカに刺された方は多いのではないのでしょうか？

音もなくわらわらとたかってくるわりには、かゆみは意外とあっさりしていて、翌日に後を引くことも少なく、イエカとは違う刺され感を感じさせるヤツです(私見です...)



〈成虫〉

ヒトスジシマカの成虫は、昼間屋外で吸血する性質をもっています。特に朝夕の時間帯に活発に人を刺しにきます。成虫はわずかな距離しか飛ばないといわれており、発生源近くの木陰、繁みや竹やぶなどに静止していて、人などの吸血源が近づくとをじっと待っています。また、人に付いて屋内にも侵入し、屋内での産卵も可能であると報告されています。

〈幼虫〉

幼虫は、雨水枡、植木鉢の水受け、古タイヤ、空き缶、バケツ、花立など、わずかな水域でも発育するため、発生源となりうる場所は非常に多いです。



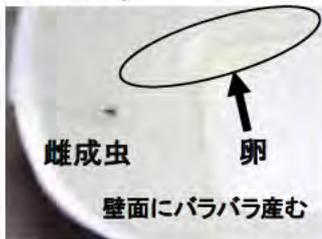
ヒトスジシマカの幼虫(ボウフラ)とさなぎ



幼虫の発生源(雨水枡、植木鉢の水受け)

〈卵〉

卵は紡錘形で、通常、水際の壁面にバラバラと産みつけられます。産卵直後は白色ですが、やがて黒色に変わります。卵は乾燥に強く、そのまま長期にわたり生存することができます。産みつけられた卵が乾燥し、物に付着したまま移動し、孵化、繁殖を繰り返してして生息分布が拡大していったと考えられています。



ヒトスジシマカの卵(右写真は解剖24時間後)



参考:アカイエカ卵塊

〈感染症〉

ヒトスジシマカが媒介するといわれている、デング熱やチクングニヤ熱は、デングウイルスやチクングニヤウイルスをもった蚊に吸血されることによっておこる感染症です。デング熱は、東南アジア、南アジア、中南米などで流行しています。またチクングニヤ熱は、アフリカ、インドや東南アジアで流行しています。日本では、今のところ蚊からウイルスが検出されたという報告ありませんが、これらの感染症は、ヒト→蚊→ヒトで感染サイクルが成立するため、人口の多い都市部では感染拡大の危険性は高く、ウイルスが日本に侵入した場合には流行が危惧されます。最近では、外国に旅行した人たちが現地で感染し帰国後に発症する輸入症例が増加しているため(デング熱輸入症例2010年12月26日現在241例、2009年92例:国立感染症研究所HPより)、今後も蚊媒介性感染症の発生動向に注意が必要です。

蚊がうつす病気を予防するには何をしたらいいの？

殺虫剤による発生源対策をとるまえに、まず一人ひとりができることとして、蚊に刺されないように気をつけることです(屋外では肌の露出は避ける・虫除け剤を使用するなど)。また、蚊を増やさないようにすることが、疾病予防対策として重要ですので、発生源となる身の回りにある水たまりを放置せず、こまめに取り除きましょう。

【検査研究課 医動物担当】

残留農薬検査(その3)

当所では、横浜市内に流通する農作物等の食品に残留する農薬の検査を行っています。平成22年度より農作物当たりの検査項目数を追加し、検査体制を一層強化しています。

今回は、平成22年9月から12月末の期間に食品専門監視班及び各区福祉保健センターより搬入された農作物等の検査結果を報告します。

1 市内産農作物

10月に搬入されたこまつな及びさつまいも(各3検体)の計6検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、こまつな1検体から農薬が検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものではありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

2 国内産農作物

9月に搬入されたいちご1検体、10月に搬入されたじゃがいも及びりんご(各3検体)の計6検体、11月に搬入されたかき、ねぎ及びほうれんそう(各3検体)の計9検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、いちご1検体、りんご3検体、ねぎ1検体及びほうれんそう2検体から農薬がそれぞれ検出されました。ただし、検出された農薬について残留農薬の基準値を超えるものではありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

3 輸入農作物(冷凍食品を含む)

9月に搬入されたいちご、冷凍未成熟いんげん(各2検体)等の計13検体、11月に搬入されたキウイ、パブリカ、ぶどう、ブロッコリー及び冷凍ほうれんそう(各1検体)の計5検体について残留農薬検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、いちご2検体、冷凍未成熟いんげん1検体、冷凍いちご1検体、冷凍チンゲンサイ1検体、パブリカ1検体、ぶどう1検体及び冷凍ほうれんそう2検体から農薬がそれぞれ検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものではありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

今回の検査で検出された農薬の概要については、7ページからの【農薬解説】を参考にしてください。



表1 残留農薬検査結果

(H22年9月～H22年12月末)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
市内産農作物						
こまつな	横浜市	3	1	アセタミプリド クロルフェナピル	0.07	5
					0.02	5
さつまいも	横浜市	3	0			
国内産農作物						
いちご	国産	1	1	アセタミプリド	0.46	5
じゃがいも	国産	3	0			
りんご	国産	3	1	ピラクロストロビン ボスカリド アセタミプリド チアクロプリド ボスカリド	0.01	1
			1		0.05	3.0
					0.03	5
					0.01	2
			1	ボスカリド アセタミプリド シハロトリン ピラクロストロビン ボスカリド	0.01	3.0
					0.06	5
					0.02	0.4
かき	国産	3	0			
ねぎ	国産	3	1	アゾキシストロビン シベルメトリン	0.01	7.5
					0.02	5.0
ほうれんそう	国産	3	1	シベルメトリン	0.02	2.0
			1	イミダクロプリド	0.59	2.5
輸入農作物						
いちご	アメリカ	2	1	ジクロルボス及びピナレド ピリメタニル フルジオキシニル マイクロブタニル	0.01	0.3
					0.26	10
					0.04	5
					0.01	1.0
			1	アセタミプリド ピラクロストロビン ピリメタニル ボスカリド マイクロブタニル	0.05	5
					0.06	0.5
					0.03	10
					0.25	15
					0.22	1.0
冷凍未成熟いんげん	タイ、中国	2	1	アゾキシストロビン	0.02	3.0
冷凍いちご	北米	1	1	カルバリル メキシフェノジド	0.03	7
					0.02	2
冷凍グリーンピース	ニュージーランド	1	0			
冷凍ごぼう	中国	1	0			
冷凍さといも	中国	1	0			
冷凍たけのこ	中国	1	0			
冷凍チンゲンサイ	中国	1	1	イミダクロプリド クロルフェナピル シベルメトリン	0.03	5
					0.11	10
					0.44	5.0
冷凍ブロッコリー	中国	1	0			
冷凍ほうれんそう	中国	2	1	シベルメトリン	0.15	2.0
			1	アセタミプリド イミダクロプリド シベルメトリン	0.01	5
					0.01	2.5
					0.03	2.0
冷凍マンゴー	タイ	1	0			
キウイ	ニュージーランド	1	0			
パプリカ	ニュージーランド	1	1	イミダクロプリド	0.02	3
ぶどう	アメリカ	1	1	ボスカリド	0.06	10
ブロッコリー	アメリカ	1	0			

表2 農薬の検査項目及び検出限界(114項目)

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
BHC (、 、 及び の和)	0.005	ジコホール	0.01	フェニトロチオン	0.01
DDT (DDE、DDD 及び DDT の和)	0.005	シハロトリン	0.01	フェンクロルホス	0.01
EPN	0.01	シフルトリン	0.01	フェンスルホチオン	0.01
アクリナトリン	0.01	シペルメトリン	0.01	フェンチオン	0.01
アセタミプリド	0.01	ジメチルピホス	0.01	フェントエート	0.01
アゾキシストロピン	0.01	ジメトエート	0.01	フェンバレレート	0.01
アルドリン及びディルドリン	0.005	シメトリン	0.01	フェンピロキシメート	0.01
イソフェンホス	0.01	スルプロホス	0.01	フェンプロパトリン	0.01
イソプロカルブ	0.01	ダイアジノン	0.01	ブタクロール	0.01
イプロベンホス	0.01	チアクロプリド	0.01	ブタミホス	0.01
イミダクロプリド	0.01	チアメトキサム	0.01	ブプロフェジン	0.01
インドキサカルブ	0.01	チオベンカルブ	0.01	フルジオキサニル	0.01
エスプロカルブ	0.01	チフルザミド	0.01	フルシトリネート	0.01
エチオン	0.01	テトラクロルピホス	0.01	フルトラニル	0.01
エトプロホス	0.005	テトラコナゾール	0.01	フルバリネート	0.01
エトリムホス	0.01	テトラジホン	0.01	プロシミドン	0.01
エンドスルファン (及び の和)	0.005	テブコナゾール	0.01	プロチオホス	0.01
エンドリン	0.005	テブフェノジド	0.01	プロパホス	0.01
オキサミル	0.01	テブフェンピラド	0.01	プロピザミド	0.01
カズサホス	0.01	テフルトリン	0.01	プロメカルブ	0.01
カフェンストール	0.01	テフルベンズロン	0.01	プロモプロピレート	0.01
カルバリル	0.01	デルタメトリン及び トラロメトリン	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
クレソキシムメチル	0.01	テルブホス	0.005	ヘキサフルムロン	0.01
クロチアニジン	0.01	トリアジメノール	0.01	ヘプタクロール (エポキシドを含む)	0.005
クロマフェノジド	0.01	トリアジメホン	0.01	ベルメトリン	0.01
クロルピリホス	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ベンコナゾール	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	パラチオン	0.01	ホサロン	0.01
クロルフェナビル	0.01	パラチオンメチル	0.01	ボスカリド	0.01
クロルフェンソン	0.01	ハルフェンプロックス	0.01	マラチオン	0.01
クロルフェンピホス	0.01	ピフェントリン	0.01	マイクロブタニル	0.01
クロルプロファミ	0.01	ピペロホス	0.01	メチダチオン	0.01
クロロクスロン	0.01	ピラクロストロピン	0.01	メキシフェノジド	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メタクロール	0.01
シアノホス	0.01	ピリプチカルブ	0.01	メトリブジン	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	メピホス	0.01
ジクロフェンチオン	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	リニユロン	0.01
ジクロラン	0.01	ピリミホスメチル	0.01	リンデン(-BHC)	0.002
ジクロルボス及びナレド	0.01	フェナリモル	0.01	ルフェヌロン	0.01

DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【農薬解説】

アセタミプリド

『モスピラン』などの商品名で販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。

4～8月に実施した検査において、アスパラガス、キャベツ、チンゲンサイ、トマト、ピーマン及びびももから検出された農薬です。

アゾキシストロピン

『アミスター』などの商品名で販売されている殺菌剤で、多くの菌類に対し強い抗菌効果があります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬で、4～8月に実施した検査において、ぶどう及びびももから検出された農薬です。

イミダクロプリド

『アドマイヤー』などの商品名で販売されている殺虫剤で、即効的な殺虫効果があります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬で、4～8月に実施した検査において、グリーンカール及びほうれんそうから検出された農薬です。

カルバリル

『セピン』などの商品名で販売されている殺虫剤で、主としてウンカ・ヨコバイ類の防除に使用され、松くい虫の予防剤としても用いられています。平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

クロルフェナピル

『コテツ』などの商品名で販売されている殺虫剤です。多くの野菜に適用があり、従来の殺虫剤に耐性がある害虫に対しても効果があります。

4～8月に実施した検査において、キャベツ、なし、パプリカ、ピーマン及びぶどうから検出された農薬です。

ジクロルボス及びナレド

ジクロルボスは『DDVP』などの商品名で販売されている殺虫剤です。一方、ナレドは農薬登録が失効された殺虫剤です。ナレドは分解してジクロルボスになるため、併せて評価することになっています。

シハロトリン

『サイハロン』などの商品名で販売されている殺虫剤です。果樹や野菜などの害虫に効果があり、家畜防疫用としても使用されています。また、耐雨性及び耐光性に富み、長い残効性があります。

シベルメトリン

『アグロスリン』などの商品名で販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。また、耐雨性及び耐光性に富み、長い残効性があります。

チアクロプリド

『バリアード』などの商品名で販売されている殺虫剤です。吸汁昆虫や咀嚼昆虫に効果があり、ミツバチなどに対しては影響が少ないとされる薬剤です。

ピラクロストロピン

『カルピオ』などの商品名で販売されている殺菌剤です。平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

ピリメタニル

『スカーラ』などの商品名で販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病を中心に、いちごのうどんこ病やりんご等の黒色病に効果があります。平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬です。

フルジオキシニル

『セイビア』などの商品名で販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病に対して極めて高い効果があります。

4～8月に実施した検査において、キャベツから検出された農薬です。

ボスカリド

『カンタス』などの商品名で販売されている殺菌剤です。各作物の灰色かび病や菌核病に対して高い効果があり、残効性や耐雨性もあります。

平成22年度より当所の検査項目に新たに追加した農薬で、4～8月に実施した検査において、トマト及びパプリカから検出された農薬です。

マイクロブタニル

『ラリー』などの商品名で販売されている殺菌剤です。野菜や果樹などのうどんこ病、さび病、黒星病などに有効的で、予防効果と治療効果を併せ持っています。

メトキシフェノジド

『ランナー』などの商品名で販売されている殺虫剤です。種々の鱗翅目害虫に対して異常脱皮を促すことによって殺虫効果を示す農薬です。

4～8月に実施した検査において、ピーマンから検出された農薬です。

参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会，農薬ハンドブック2001年版
- ・農薬残留分析法研究班，最新農薬の残留分析法(改訂版)
- ・農林水産消費安全技術センター及び各農薬製造会社H.P.

【検査研究課 微量汚染物担当】



魚介類中の抗生物質、合成抗菌剤検査結果(その3)



平成22年11月から12月に食品専門監視班が収去した、市内流通の甲殻類(エビ8件)及び凍結直前未加熱加熱後摂取冷凍食品の甲殻類(エビ2件)の計10件について、抗生物質のテトラサイクリン系(3項目)及びクロラムフェニコール、並びに合成抗菌剤のニトロフラン類(3項目)及びエンロフロキサシン等(28項目)について計35項目の検査を行いました。その結果、表に示すとおり、いずれも不検出でした。

表 抗生物質、合成抗菌剤の検査結果

項目名	検査結果 (カッコ内の数字は基準値)		検出限界
	甲殻類<8件>	冷凍食品の甲殻類<2件>	
【抗生物質】			
オキシテトラサイクリン	N.D. (0.2)	N.D. (*)	0.02
クロルテトラサイクリン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.03
テトラサイクリン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.02
クロラムフェニコール	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.0005
【合成抗菌剤】			
ニトロフラントイン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.001
フラゾリドン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.001
フラルタドン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.001
エンロフロキサシン (シプロフロキサシンを含む)	N.D. (*)	N.D. (*)	0.005
オキシリニック酸	N.D. (0.03)	N.D. (*)	0.01
オフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
オルビフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
オルメトプリム	N.D. (*)	N.D. (*)	0.02
クロピドール	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
サラフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ジフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファキノキサリン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファジアジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファジミジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファジメトキシシ	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファドキシシ	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファピリジシ	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメトキサゾール	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメキシピリダジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメラジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファモノメトキシシ	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ダノフロキサシン	N.D. (0.1)	N.D. (*)	0.01
チアンフェニコール	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
トリメトプリム	N.D. (0.05)	N.D. (*)	0.02
ナリジクス酸	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ノルフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ピリメタミン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.02
ピロミド酸	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
フルメキシ	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
フロルフエニコール	N.D. (0.1)	N.D. (*)	0.01
マルボフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01

単位: ppm N.D.: 不検出 *: 「含有しない」 検出限界: 検出される最小の限界量

【検査研究課 微量汚染物担当】

感染症発生動向調査委員会報告 12月

今月のトピックス

感染性胃腸炎の定点あたりの報告数が、警報レベルの「20」を超えました。

インフルエンザは、市全域ではまだ流行の目安となる定点あたりの報告数が「1」に達していませんが、金沢区、戸塚区、栄区及び泉区は高めです。

市内のインフルエンザ迅速診断キットにおけるB型の報告割合が3割近くを占めています。B型の多くが金沢区からの報告です。

平成22年12月の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。(ただし、性感染症については平成22年11月分)

全数把握疾患

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

12月は15日現在で2例の報告がありました。感染経路については不明です。

腸管出血性大腸菌感染症の発生時の対応については、横浜市衛生研究所HPを御覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/inf_c0157_guide.html

< レジオネラ症 >

12月は15日現在で1例の報告がありました。感染経路は不明です。レジオネラ症は、水中や土壌に通常存在しているレジオネラ属菌による感染ですが、15～43℃で繁殖し、循環式浴槽水、空調施設の冷却水、給湯器等の人工的な温水中に生息するアメーバ等原虫の細胞内で増殖するために、打たせ湯やジャグジー、加湿器、噴水等で発生したエアロゾルを吸入することで気道感染を起こして発症することが知られています。レジオネラ症については、国立感染症研究所HPを御覧ください。

<http://idsc.nih.gov/jp/disease/legionellosis/sokuho0718.html>

< アメーバ赤痢 >

12月は15日現在で1例の報告がありました。感染経路は不明です。アメーバ赤痢は、飲食物を介した経口感染や性的接触により感染します。横浜市では1月から現在までに34件の報告があり、男性30件に対し女性は4件でした。経口感染によるものが9件、性的接触によるものが6件、感染経路不明が19件でした。

アメーバ赤痢については、横浜市衛生研究所HPを御覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/entamoeba1.html>

< ウイルス性肝炎 >

12月は15日現在で1例の報告がありました。B型肝炎でした。性的接触により感染しますが、遺伝子型(genotype)によって、臨床経過に差があることが知られています。

国内のgenotypeについては、国立感染症研究所HPをご覧ください。

<http://idsc.nih.gov/jp/iasr/27/319/dj3191.html>

また、横浜市での1月から現在までの肝炎の報告は、B型肝炎が2例のみでした。急性ウイルス性肝炎は、A型とE型は四類の届出、それ以外のウイルス性急性肝炎は五類感染症の全数届出となっています。

届出基準と届出様式は横浜市衛生研究所HPを御覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/infection/todoke.html>

< 劇症型溶血性レンサ球菌感染症 >

12月は15日現在で1例の報告がありました。40歳代の女性です。創傷感染でした。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、死亡率の高い疾患です。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症については、国立感染症研究所HPを御覧ください。

http://idsc.nih.gov/jp/idwr/kansen/k02_g2/k02_46/k02_46.html

<HIV感染症>

12月は15日現在で1例の報告がありました。男性の同性間性的接触によるものでした。

HIV感染症については、横浜市衛生研究所HPを御覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/hiv.html>

<梅毒>

12月は15日現在で2例の報告がありました。

梅毒については、横浜市衛生研究所HPを御覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/syphilis1.html>

<風しん>

12月は15日現在で1例の報告がありました。

風疹については、横浜市衛生研究所HPを御覧ください。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/rubella1.html>

定点把握疾患

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:91か所、内科定点:59か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計197か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計150定点から報告されます。

平成22年 週一月日対照表

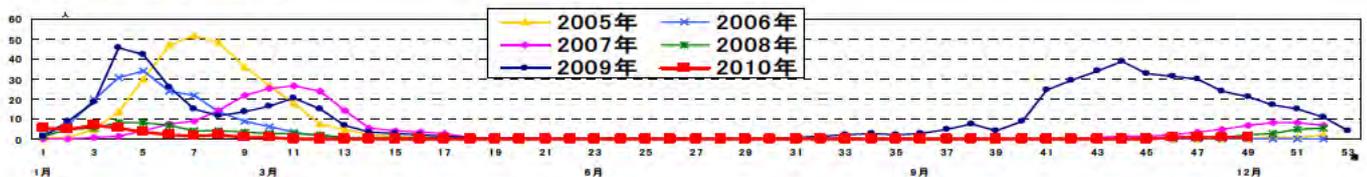
第45週	11月 8～ 14日
第46週	11月15～ 21日
第47週	11月22～ 28日
第48週	11月29～12月 5日
第49週	12月6～12日

<インフルエンザ>

第49週では定点あたりの報告数は0.98です。行政区別では金沢区が3.75、戸塚区が2.70、栄区が1.60、泉区が1.57と高めです。全国では0.93、神奈川県0.92、川崎市0.51、東京都1.04です。

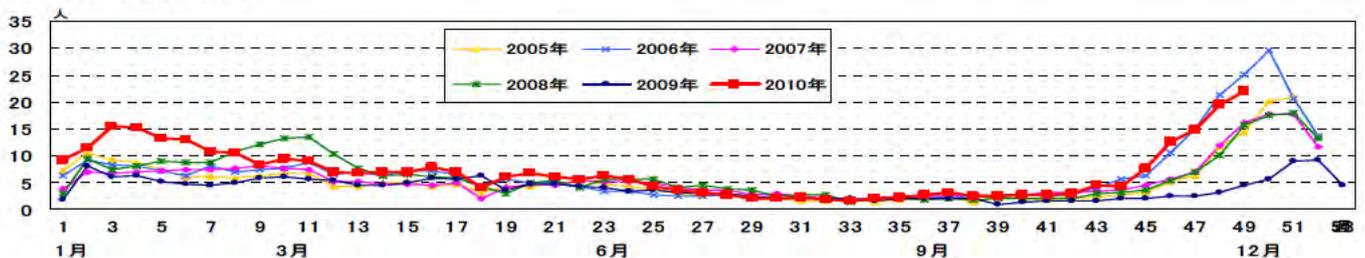
定点医療機関にご協力をいただいている迅速キットでは、A陽性が82件、B陽性が31件でした。金沢区ではA陽性が5件、B陽性が22件と、市内B型の多くが金沢区で報告されています。

11月からの市内集団かぜの検査では、金沢区の小学校がB型、泉区、都筑区、戸塚区、瀬谷区の計4施設ではA香港が検出されています。市内病原体定点では、今週はB型が1件(港北区)検出されています。全国の病原体検出状況では第36週から49週までにAH1pdm(新型)が165件、AH1(ソ連)は0件、AH3(香港)は380件、B(ビクトリア)は17件、B(山形)が2件検出されています。今後、金沢区のB型の流行に注目していく必要があります。



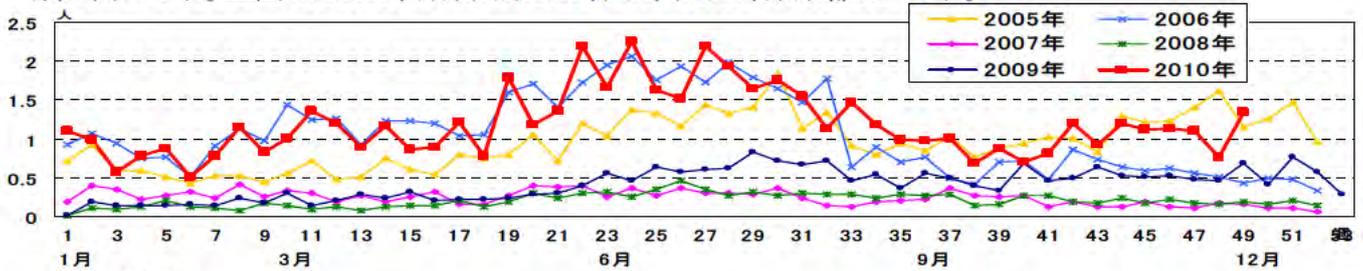
<感染性胃腸炎>

第49週では定点あたり22.01で、警報レベルです。行政区別では緑区36.60、神奈川区33.17、瀬谷区32.50、旭区32.40、港北区28.25、港南区27.80、泉区25.00、都筑区24.50、戸塚区23.67、磯子区22.00の10区が警報レベルです。全国では17.23、神奈川県21.26、川崎市22.06、東京都19.35と、広い範囲で流行が見られています。



<流行性耳下腺炎>

第49週では定点あたり1.34です。行政区別では、神奈川区が3.33、磯子区2.75、緑区2.20港北区2.13の順に高めです。全国では1.30、神奈川県1.23、川崎市1.09、東京都0.37です。



<性感染症>

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の10定点、および泌尿器科・皮膚科系の17定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

11月は、性器クラミジア感染症は男性18例、女性13例、性器ヘルペスウイルス感染症は男性4例、女性9例でした。尖圭コンジローマは男性4例、女性4例、淋菌感染症は男性16例、女性2例でした。

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときのみ行っています。

<ウイルス検査>

12月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点 57 件(鼻咽頭ぬぐい液 49 件、ふん便 7 件、直腸ぬぐい液 1 件)、内科定点 13 件(鼻咽頭ぬぐい液)、眼科定点 2 件(眼脂)、基幹定点 3 件(鼻咽頭ぬぐい液 2 件、髄液 1 件)でした。患者の臨床診断名別内訳は、小児科定点は上下気道炎 32 人、インフルエンザ 7 人、胃腸炎 8 人、流行性耳下腺炎 2 人、RSV 感染症 2 人、アデノ感染症 2 人、ヘルペス感染症 1 人、手足口病 1 人、りんご病 1 人、発熱のみ 1 人、内科定点はインフルエンザ(疑いを含む)9 人、上下気道炎 3 人、感冒(胃腸型)1 人、また、眼科定点の 2 人は流行性角結膜炎、基幹定点の 3 人はそれぞれ不明熱、伝染性単核症疑い、脳炎でした。

1月7日現在、小児科定点のインフルエンザ患者 5 人からインフルエンザウイルス AH1pdm 型、2 人からインフルエンザウイルス AH3 型、上下気道炎患者 3 人とアデノ感染症患者 1 人からアデノウイルス(型未同定)、RSV 感染症患者 1 人から RS ウイルス、流行性耳下腺炎患者 1 人からムンプスウイルス、ヘルペス感染症患者 1 人からヘルペスウイルス、内科定点ではインフルエンザ(疑いを含む)4 人からインフルエンザウイルス AH1pdm 型、2 人からインフルエンザウイルス B 型、眼科定点では流行性角結膜炎患者 1 人からアデノウイルス(型未同定)が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の上下気道炎患者 6 人と RS ウイルス感染症患者 1 人から RS ウイルス、胃腸炎患者 6 人からノロウイルス G2 型、上下気道炎患者 4 人からヒトコロナウイルス OC43 型、上下気道炎患者 3 人からインフルエンザウイルス AH1pdm 型、アデノ感染症患者 1 人からインフルエンザウイルス AH3 型、手足口病患者 1 人からコクサッキーウイルス A6 型、内科定点のインフルエンザ患者 1 人からインフルエンザウイルス AH3 型、基幹定点の伝染性単核症疑い患者からインフルエンザウイルス AH3 型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【検査研究課 ウイルス担当】

<細菌検査>

12月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点からの検体が2件でいずれも起因菌は検出されませんでした(表)。

基幹定点からは菌株受付が10件、定点以外の医療機関からは菌株が1件でした。そのうち、基幹定点か

ら、腸管病原性大腸菌が2件(O18:H7)、腸管出血性大腸菌が1件(O157:H7, VT2)検出されました。

定点以外の医療機関からの1件は腸管出血性大腸菌(O157:H-, VT1&2)でした。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点からの7件で、A群溶血性レンサ球菌が6件から検出されました。その血清型はT1、T12、T25、TB3264でした。

表 感染症発生動向調査による病原体調査(12月) 細菌検査

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	12月			2010年1~12月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌					4	5
腸管病原性大腸菌		2			11	
腸管出血性大腸菌		1	1		5	55
腸管毒素原性大腸菌				1	3	
チフス菌						1
パラチフスA菌					1	1
サルモネラ				2		2
カンピロバクター				1		
黄色ブドウ球菌				1		
不検出	2	7	0	17	66	1

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	12月			2010年1~12月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌						
T1	1			26	1	1
T4				3		
T6				1		
T12	3			10		
T13				1		1
T25	1			3		
T28				15		
T B3264	1			3		
型別不能				4		
G群溶血性レンサ球菌				1		
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌			16		2	16
バンコマイシン耐性腸球菌			4			7
髄膜炎菌						1
<i>Streptococcus suis</i>						1
<i>Corynebacterium ulcerans</i>					1	
<i>Legionella pneumophila</i>			1			1
セレウス菌			1			1
破傷風菌			1			1
不検出	1	0	0	30		10

* 定点以外医療機関(届出疾病の検査依頼)

T(T型別):A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【検査研究課 細菌担当】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成22年11月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成22年12月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成22年11月のアクセス件数、アクセス順位及び平成22年12月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成22年11月)

平成22年11月の総アクセス数は、199,047件でした。主な内訳は、感染症64.3%、食品衛生12.9%、保健情報9.0%、検査情報月報4.8%、生活環境衛生1.3%、薬事1.1%でした。

(2) アクセス順位 (平成22年11月)

11月のアクセス順位(表1)は、第1位が「アシネトバクター感染症について」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「サイトメガロウイルス感染症について」でした。

第1位は「アシネトバクター感染症について」でした。

9月3日に帝京大附属病院で、多剤耐性菌アシネトバクター・バウマニ(MRAB)による大規模な院内感染について報道発表され、10月末までに60人の感染が確認されました。

この影響もあって、アクセス数が多かったものと思われます。

多剤耐性アシネトバクターは、通常のアシネトバクターと比べて病原性が特段強いわけではありませんが、カルバペネム系をはじめ、ほとんどの抗生物質が効きません。

2000年頃から欧米で警戒され始め、国内では、約850病院が登録する「厚生省院内感染対策サーベイランス(JANIS)」で発生が確認されていましたが、帝京大附属病院での死者を出す集団感染が判明して危機感が高まりました。

このため厚生労働省は、平成23年2月から多剤耐性アシネトバクター感染症を、全国の470指定医療機関を対象とした「五類感染症・基幹病院定点(月報)」としての報告を義務付け、発症動向調査を行い、全国的に対策を促すことになりました。

第2位は「マイコプラズマ肺炎について」でした。

国立感染症情報センターの報告によりますと、マイコプラズマ肺炎の定点当たり報告数は、第44～48週(11/1～12/5)において増減を繰り返していますが、過去5年間の同時期と比較してかなり多い状況で推移しています。

この影響もあって、アクセス数が多かったものと思われます。

表1 平成22年11月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	アシネトバクター感染症について	8,950
2	マイコプラズマ肺炎について	7,734
3	サイトメガロウイルス感染症について	4,798
4	衛生研究所トップページ	4,100
5	横浜市感染症情報センター	2,959
6	感染症発生状況	2,880
7	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,408
8	ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について	2,272
9	百日咳について	2,090
10	大麻(マリファナ)について	1,961

データ提供: 総務局IT活用推進課

第3位は「サイトメガロウイルス感染症について」でした。

11月に「難聴起こすウイルス、新生児300人に1人感染 厚労省」という新聞記事が出ました。

厚生労働省の研究班が全国25施設で生まれた新生児2万1272人(2010年7月末時点)を対象に国内初の大規模な調査をした結果、胎児の時に「サイトメガロウイルス」に感染すると、難聴や脳に障害が起きる危険性のある新生児が300人に1人の割合でいることがわかりました。この影響もあり、関心が高かったものと思われる。

(3) 電子メールによる問い合わせ (平成22年12月)

平成22年12月の問い合わせは、ありませんでした。

2 追加・更新記事 (平成22年12月)

平成22年12月に追加・更新した主な記事は、13件でした(表3)。

表3 平成22年12月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
12月1日	健康被害シリーズ(薬事情報)	更新
12月1日	薬事法改正に伴う指定薬品の設定について	更新
12月1日	当所で検査した無承認無許可医薬品リスト	追加
12月2日	インフルエンザワクチンについて	更新
12月2日	2010年度のインフルエンザワクチンについて	追加
12月2日	ブルセラ症について	更新
12月7日	感染症に気をつけよう (12月号)	追加
12月16日	髄膜炎菌性髄膜炎について	更新
12月17日	横浜市における自殺の現状 - 人口動態統計と神奈川県警データの解析 - (平成19年～21年)	追加
12月24日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
12月24日	横浜市インフルエンザ等流行情報 1号	追加
12月27日	ホームページ満足度調査	追加
12月28日	ニューデリー・メタロ-β-ラクタマーゼ1(NDM-1)産生多剤耐性菌について	更新

【 感染症・疫学情報課 】